

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520316

研究課題名(和文) 公的言説から文学テキストへ アメリカ南部文学の自伝的作品と近代日本の私小説

研究課題名(英文) From Public Discourse to Literary Text: A Comparative Study of Autobiographical Novels in the American South and "I"-Novels in Modern Japan

研究代表者

後藤 和彦 (Goto, Kazuhiko)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：10205594

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：アメリカ南部文学に顕著な傾向を「釈明の衝動」という語で表現し、自伝をその優勢な形式として挙げたFred HobsonのTell About the South(1983)の成果を踏まえ、こうした文学を産出してきた南部社会に働く力学をその文化的風土の歴史的特徴へと辿りつつ、特に「私」の来し方を説き語る文学が、その「私」の所属する社会にまつわる公的な言説から直接由来している点に着目、南部文学における「公・私」の連結という特徴をより前景化するため、両者の分裂、文学言説の私化、公的領域からの撤退を特徴とする近代日本に支配的な文学形式「私小説」との比較考察を行なった。

研究成果の概要(英文)：This study, building on Fred Hobson's important critique in his *Tell About the South* (1983) --that the American South has maintained "rage to explain" as one of its dominant cultural characteristics; therefore, its literature has had a tendency to become autobiographical--first, explored the South's historical background in order to see how this literary mechanism is produced, particularly focusing on how its literary works have often been direct outputs of the writers' or other opinion makers' public addresses concerning socio-historical problems enfolding them, and, secondly, in order to foreground this peculiarity of the southern literature, compared it with modern Japanese literature where severance of literary narrative from public discourse has always been considered as its unique trait. This study was organized through a series of comparative analyses between individual literary texts of southern autobiographical novels and modern Japanese iconic "I"-novels.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ南部文学 日本近代文学 自伝的傾向 私小説

1. 研究開始当初の背景

(1) フレッド・ホブソンによれば、アメリカ南部人に自己証明の衝動が強く現れることは、南部がアメリカという国で占めてきた立場が、この豊かで強く成功をおさめた一族のうちにあって、際だって貧しく打ち負かされ罪悪感にとらわれたメンバーのそれであったことに由来し、それゆえ彼らの生活諸般にまつわって顕現する南部的、すなわち非アメリカ的特徴を捕らえ釈明することが彼らの第一の衝動となるのであり、勢い彼らはそれらの諸特徴に対する「弁明派 (apologist)」と「批判派 (critic)」とに二分されることとなる。

(2) 研究代表者は平成 21 年度から 3 年にわたり、科研費基盤研究 (C) 「アメリカ南部文学におけるナショナル・ナラティブの意義 近代日本文学との比較考察」と題し、ナショナリズムと文学的想像力の関係、特にアメリカ南部や近代日本が「文化の敗北」(Wolfgang Schivelbusch, The Culture of Defeat [2001]) を経て後、後発的かつ性急な近代化あるいはナショナルライゼーションに際しておびただしく産出してきた種々の社会的言説から、それらに後続する文学作品のテキストへの発展のプロセスを想定し調査分析してきた。この研究の対象は、言い換えれば、「文学未満」のテキストであり、「文化の敗北」後の「国」の文化的価値の再配置という緊急事態が、それらテキストを駆動させる原動力としてすぐ背後に存在するため、その社会的原動力のより生々しい素性を如実に示す種類のテキスト群であった。

(3) 同研究の前提は、こうした宗教的・政治的・社会批評的に雑多なテキスト群と、文学テキストの間に一定の径庭が存在するということだったが、そこでホブソンが「批判派」「弁護派」のフォーミュラを提出した研究書 (Tell About the South [1983]) において取り上げた文筆家達をあらためて眺めやれ

ば、彼らは文学テキストの産出者では決してなく、文学未満のテキストの産出者でこそあった。この点はホブソン自身も十二分に意識的ではあるのだが、「弁明派」「批判派」という明確な二分法は、調査分析の作業上きわめて有効な定式を提供するとはいえ、文学テキストそのものにこの二分法が易々と適用できるとは思われず、したがってこの研究の発展形として、文学テキストを中心的対象とする研究が遂行される必要があった。

2. 研究の目的

(1) 今次研究では、ナショナルなものを巡る種々の歴史的事態が文学者の内的経験として内向化あるいは「私」化されたのちの文学テキストへと調査分析対象を移行し、旧研究においては種々雑多な文学未満の文化的テキスト群から文学テキストの萌芽を見出し、文学テキストへと展開してゆく可能性を検証してきたのに対し、その成果を踏まえつつ、たとえば小説や詩といった文学テキストの内部を精査することで、公的・文化的テキストから私的・文学テキストへの昇華の具体的なプロセスを分析することを第一の目的とした。

この際、作業の段階的目標として

ホブソンの南部社会に対する「弁明派」および「批判派」の二分法のフォーミュラを活用し、私的テキストとしての文学テキストに当然予想される両者の葛藤・推移・相互浸潤などといった文学テキスト内に見られる兆候の分析を行なう

テキスト内に言及される歴史的状況を具体的な歴史的イベントへ、旧研究で得られた文化的テキストの分析データを経由して遡及的に辿り直し、あらためて歴史的イベントから文学テキストに至る経緯を記述する

以上を踏まえ、今次研究の最終目標である歴史的状況から、それに対する直接的応答としてのナショナル・ナラティブへ、またそこ

から文学テキスト(「プライベート・ナラティヴ(private narrative)」ないし「リテラリー・ナラティヴ(literary narrative)」)へ、すなわち「公的言説」から「私的言説」への連続性の確認を行なう 以上の三段階を措定した。

(2) 研究代表者の管見によれば、ホブソンばかりでなく、南部文学の歴史記述に興味をもって取り組んできた研究成果は、ほぼ一様に、アメリカ南部文学におけるナショナル・ナラティヴとリタラリー・ナラティヴの連続性という特徴を、南北戦争の敗北を招来し、またその悲劇的結果によって改めて強化されてきた南部社会のアメリカ社会における異端的かつ前近代の特徴(奴隷制度ないし人種隔離制度に依存する農本主義的特徴)とその市民生活への浸透・支配によって生じてきたと説く。しかし、社会における歴史的事態が文学作品に比較的素朴に反映するという事態は、たとえば近代後発性を南部と共有し合う我が国の文学的状况には必ずしも明瞭に見出すことはできない。日本近代文学においてまず隆盛を迎えた自然主義という文学潮流について、欧米の自然主義の不可欠の構成要素としての「私」の社会性が日本社会に欠落していることを説いて批判した小林秀雄の「社会化した私」論は、日本における国体(national polity)の特殊性を「天皇の赤子」という発想に端的にうかがえるような、日本近代における「公・私」領域の社会契約的な「断絶」を経ない「ムラ」的共同体の心情が、管理国家体制の維持に巧妙に吸い上げられ、国全体がどこか「私」世界の延長であるといった錯覚を民間に用意した点に見る丸山真男の「超国家主義の論理と心理」等の論考と気脈を通じ、日本近代文学が「文壇」という孤立傾向の高い集団の構成員の個別の生活を描く極私的ディスコースを支配的モードとしてきた社会背景的因果を明らかにしている。本研究は南部文学の特徴を相対化する

ために、近代日本文学におけるいわゆる「私小説」を比較考察の対象とし、上記作業目標それぞれを適用しつつ同時並行的に分析を進めることとした。

3. 研究の方法

(1) 第一に、相対的に「弁明派」として分類することの可能な文学者(具体的には William Faulkner)の作品群を取り上げ、上記「研究目的」で取り上げた 三段階の作業目標に従って調査分析を行なった。繰り返しとなるが、ある文学者の文学作品が南部社会のナショナル・ナラティヴを形成しようとする社会的諸力に対して、単純に肯定的・保守的・支援的であったり、反対にこれまた単純に否定的・批判的・革新的であったりすることはありえない。実際の文学テキストを目の当たりにすれば、そこにはあくまで肯定と否定の葛藤・推移・相互浸潤など、単純には措定しがたい動態を見出すことになるのは容易に予想され、またそのような捕らえがたい様態こそがリタラリー・ナラティヴのレゾン・デートルであり、その動態をできるだけ詳細に記述するという作業を本研究の最重要な基底とした。

(2) 続いて「批判派」の範疇に分類される文学者(具体的には特に Mark Twain)の作品を研究対象として取り上げた。殊にアメリカの国柄にある自由闊達の気風を知りつつ、歴史的風土に根ざした社会上の硬直化した約束事に拘束されることを余技なくされてきた南部人文学者はすべて「批判派」の気質を幾分なりとも分有するとも言えるだろうが、とはいえ、こうした批判を徹底して抑圧してきたのが南部の文化的風土であることはすでに南部文化史家 W. J. Cash(彼はホブソンによって「批判派」の代表格のひとりとして取り上げられてもいた)によって“Savage Ideal”あるいは“Proto-Dorian Bond”と表現され、それらは彼唯一の著作 The Mind of the South(1941)の鍵概念として広く知ら

れている。1920年代に訪れた南部文芸の繚乱たる開花は、たとえば当時の文壇に君臨した文芸評論家 H. L. Mencken の“The Sahara of the Bozart” (1920) の南部における文明不在批判に触発された果敢な若い想像力が故郷の風土の精神的重力からみずからの肉を裂くのもいとわず、そこから身を引きはがすことをなし得て初めて可能であった。キャッシュは 20 年代後半以降こうした自由な文学的想像力が保守的南部にも誕生したことを言祝い、彼らが故郷南部に理知的批判を下す時、その心底にあるのは「愛するひとを思うままにできず自暴自棄となった恋人が持つような憎しみ」であると表現した。こうしたアンビヴァレンスはすでに「弁明派」のものもあったのだが、ここでは彼より明確に「批判派」としての文名をなした作家を研究対象とし、その文学テクストならではの複雑な様相をできるだけ正確に記述することを試みた。

4. 研究成果

(1) 今次研究の成果としては、研究計画の段階で一定の予想を立てておいた、アメリカ南部文学における自伝的小説と日本近代文学の私小説における類縁性と異質性とそのよってきたところを確認することができた点がまずはあげられるだろう。両者に共通する「自伝性」については、これも予見通り、アメリカ南部および近代日本に共通の特徴である「後発近代性」、すなわち暴力的な衝迫性をもって外部より、しばしば軍事的威圧とともに押し寄せる「近代」に国家的かつ民族的に屈服せざるを得なかったという歴史的事態が出来させた「文化の転轍」、要するに、今や新しい世界的基準となろうとしている「正義」への遵守を迫る外的威圧を一方で肯んじつつ、みずからその「正義」に即応し得なかったことに対する口惜しさ、自己嫌悪、さらに「正義」を「正義」と知りながら、みずからの歴史的・特殊性・民族的独自性を省み

つつ虚しい反発を試みるといった、一種の精神的代償行為とも言うべき「対抗文化」の形成、すなわち上記シヴェルブシュのいう「敗北の文化」の形成に基底をもつ両文化の共通点に由来することを明らかにした。

(2) 一方で、アメリカ南部文学の自伝的衝動と日本近代文学に特徴的な「私小説」のあいだの相違もまた具体的な作家間の比較—具体的には、上記に記した「批判派」に所属すると見なしうるトウェインと島崎藤村、また「弁護派」の範疇に収まると目されるフォークナーと同じく藤村との比較—を通じて、留保を含みつつ、明らかにすることができたと考えている。両者の相違は、両「敗北の文学」(研究代表者が平成 17 年に発表した単著のタイトルである)のうちに存在している、「敗北の文化」に直接関与する「公的言説」から、本来文学がそうであるべき「私的言説」への径庭における曲折の差異に由来するという点もやはり研究の過程において確認することができた。

(3) 今次研究の最終段階においては、今回「文化の敗北」という観点から日本近代文学全体に比較対象の射程を広げたところを、「文化の敗北」であるとともに現実の軍事的敗北を伴った、いわゆる第二次世界大戦後の「戦後文学」へとより限定し、南北戦争の「戦後文学」としての南部文学とこれを比較する試みを行った。結果、上記で述べた「公的言説」と「私的言説」との径庭とは、すなわちアメリカ南部文学と日本のいわゆる「戦後文学」における「戦後性」に対する認識の相違ではないかという新たな観点へと達することとなった。具体的には大江健三郎とマーク・トウェイン、中上健次とウィリアム・フォークナー、加えて村上春樹と Raymond Carver との比較の視座を構築することが可能であることを見出すに至った。カーヴァーは決して南部文学者ではないのだが、そもそもベトナム戦争以後の南部文学における

伝統的特質の喪失、あるいは逆にヴェトナム戦争敗北後一合衆国建国以来初めての民族的敗北とも呼ぶべき画期的事件一のアメリカ文学全般における「南部文学化」とも言うべき興味深い事態を射程におけば、今次研究の思わぬ副次的成果が上がるとうとしているとも言えるだろう(以上は今年度中に公刊の予定である)。いずれにせよ両「敗北の文学」における「戦後性」については、今次研究を発展継承すべき研究として見るべき可能性と深みを秘めているのは明らかであり、この方向で新たに研究補助を申請し、幸いなことにこの度正式の認可を得ることもできた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

いずれも単著、査読なし

後藤和彦 家・父・伝説—フオークナーの『土にまみれた旗』と島崎藤村の『家』(『フオークナー』第17号、2015年4月) pp. 112-126.

後藤和彦 奴隷解放とアメリカ文学(『アメリカ文学研究』第75号、日本アメリカ文学会東京支部、2014年6月) pp. 1-7.

後藤和彦 南北戦争期におけるマーク・トウェインのふるまい(『マーク・トウェイン—研究と批評』第13号、南雲堂、2014年4月) pp. 10-18.

後藤和彦 トウェインとインディアン—シリーズエッセイ マーク・トウェイン研究余話 10(『マーク・トウェイン—研究と批評』第13号、南雲堂、2014年4月) pp. 4-8.

後藤和彦 愛する男、愛される少年—『王子と乞食』から『ハックルベリー・フィンの冒険』へ—シリーズエッセイ マーク・トウェイン研究余話 9(『マーク・トウェイン—研究と批評』第12号、南雲堂、2013年5月) pp. 4-10.

後藤和彦 マーク・トウェインの「転向」—シリーズエッセイ マーク・トウェイン研究余話 8(『マーク・トウェイン—研究と批評』第11号、南雲堂、2012年5月) pp. 4-8.

[学会発表](計6件)

後藤和彦、大西直樹、奥田暁代、越智博美、

三牧聖子 (シンポジウム講師)「愛国の語り方、反戦の唱え方—アメリカの戦争をめぐる文学者・知識人の言説」司会(アメリカ学会第49回年次大会・国際基督教大学(東京三鷹市) 2015年6月)

丹治愛、原田範行、後藤和彦、高橋和久、阿部公彦 (シンポジウム講師)「文学史を書くこと、文学史を教えること」講師(日本英文学会北海道支部第59回大会・北海道武蔵女子短期大学(北海道札幌市) 2014年10月)

後藤和彦、荒このみ、山辺省太、有光道生 (シンポジウム司会)「奴隷解放宣言 150年—現代アメリカ作家が描く奴隷解放」司会・講師(日本アメリカ文学会東京支部月例会・慶應義塾大学(東京都港区) 2013年12月)

阿部公彦、井出新、後藤和彦、高橋和久 (シンポジウム講師)「古典の困難—それでも、やっぱり、教えたい?」講師(日本英文学会関東支部第8回大会・日本女子大学(東京都文京区) 2013年11月)

後藤和彦、佐久間みかよ、上西哲雄、三杉圭子 (シンポジウム司会・講師)「マーク・トウェインと戦争」司会・講師(日本マーク・トウェイン協会第17回大会・慶應義塾大学(東京都港区) 2013年10月)

後藤和彦 (招聘講演)「南北戦争期におけるマーク・トウェインのふるまい」(日本英文学会北海道支部第58回大会・北海道大学(北海道札幌市) 2013年10月)

[図書](計5件)

千石英世編、杉浦銀策、高山宏、富山太佳夫、後藤和彦、西谷拓哉、橋本安央、大島由紀子、野谷文昭、宇野邦一、前田良三、マイケル・ダイヤー (共著)白鯨 シリーズ もっと知りたい名作の世界 (ミネルヴァ書房、2014年12月) pp. 60-72.

藤平育子監修、高尾直知・舌津智之編、丹羽隆昭、新田啓子、諏訪部浩一、渡辺信二、田中久男、花岡秀、若島正、長畑明利、中尾秀博、田辺千景、篠目清美、オニキ・ユウジ、後藤和彦、平石貴樹、千石英世 (共著)抵抗することば—暴力と文学的想像力(南雲堂、2014年7月) pp. 287-304.

澤田直編、阿部賢一、昼間賢、林志津江、坂本浩也、後藤和彦、藤井淑禎、新田啓子他 (共著)移動者の目が露出させる光景—越境文学論(弘学社、2014年3月) pp. 113-31.

新田啓子編、林みどり、後藤和彦、渡辺憲司、小野沢あかね、舌津智之、黒岩裕市、梅沢弓子、田中治彦 (共著)ジェンダー研究

の現在一性という多面体(有斐閣、2013年4月) pp.51-78.

平石貴樹、後藤和彦、諏訪部浩一編、中野学而、貞廣真紀、田辺千景、高尾直知、新井恵子、舌津智之、上西哲雄、新納卓也、中谷崇、三浦玲一 (編著) アメリカ文学のアーナーロマンス・大衆・文学史(松柏社、2013年3月) pp.385-8.

〔産業財産権〕
出願状況(計〇件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計〇件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

後藤 和彦 (GOTO KAZUHIKO)
立教大学・文学部・教授

研究者番号：10205594

(2) 研究分担者

なし

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし